

脈

血

生 放 溪 安

血

脈

安

溪

放

生

原始の眼

龍 涎 寺 文 雄

五年過した。その年月の層がはつきり判る。だが、その裡に搖曳する自分の表情を捉へようとすると毎に、僕は言ひ知れぬ困惑に襲はれる。碎けた駒のやうに飛び散つた自分を、今かき集める事は何んと至難な業か。

私は自分の性格を空の四方にばら撒いた

此れからは拾ひ集めるに骨の折れる事だらう

ポオドレルがさう言つた。君はその至難な業をやつてのけた。「血脈」一卷、まことに鮮な聚集ぶりである。僕は君の俳句のこまめな讀者ではなかつた様だ。だがその俳句を支へて居る君の顔だけは、はつきり知つてゐる。それは分散を知らなかつた顔だ。

僕はそこに水を眺め雲を仰いだ美しい原始の眼を感じる事がある。思ふに、君と、君を取巻く自然とは緊密な均衡を保つてゐるに違ひない。でなければ、句集を通して鳴り響く、あの生命の音がどうして持續出来やう。

君の俳句には理窟がない。君は俳句の理窟を並べたてたし、又随分理窟っぽい句を作つた様に見られてゐるがそれは唯單に、そう見られたに過ぎない。人間いろいろと唯、單にさう見られる。

君の捉へた世界は理窟をぬいた世界だ。そこには流れること燃えることが、自の自己證明をなし、解決づけてゐる世界だ。冷徹に見える一句一句も、見据えたならば何と熱つばい眼眸によつて貫ぬかれてゐるか。やはり、青春は君を捕へそこねてはゐない。それが、幸か不幸かの穿鑿は要らぬことだ。藝術の世界は幸なところにも、不幸なところにも、ありはしないのだ。

序

作つた句はいつの間にやら散亂してしまつてゐたし、発表した雑誌も人に請はれるまゝに進呈して手元に一冊も残つてはゐなかつた。

碎けた駒のやうに飛び散つてしまつた自分の句をかき集められようとは夢想だにもしてゐなかつたところだ。

然し幸ひにも中川正文君が彼の卒業記念だと云つてその至難な業をなしとげてくれた。而も彼は「血脈」一巻を私の手元に遺して間もなく應召して征つた。私の「血脈」であり乍ら全く中川君の血が脈うつてゐることを想はずには居られない。そして至らぬ私の句を纏めあげてくれたことは私に一時期を劃してくれたのだと思ふ。私を「血脈」から超えさせようとする大いなる力のあることを感ずる。

今、「血脈」の拔萃をし乍らこれほど身近にも中川君を見出せることの嬉しさを味はつてゐる。そしていつまでも電車の窓から振つてゐた彼の長い手だけが奇妙に脳裡に浮んでくる。

「あの手だ」と私は無意味に呟くのである。さうして最後に中川君の武運長久を念ずるばかりである。

昭和十七年二月四日

母よただ淺學冬は冬と和し

短日のこの椅子をたちてゆくべし

ひとの家の秋なり號外手にし立つ

野にも遠く此の秋曼珠沙華をみす

冬日宙人あり己をのみいとしむ

冬木眼におさえる咳のこみあぐる

どん底を秋水奔流して去りぬ

歸郷 二句

セル寒く母と向ひし懐手

まつきいに稻田段丘して海へ

母老ひぬ 八句

うすき胸に汗したまひて母老ひぬ

母老ひぬ晝寢の乳房たるるなく

この乳房ち小さしふれてはふとあからむ

この乳房ふれて子供のごと熱し

汗たれて 蜆汁食ふ母の前

安易なるくらしよ母よ三五夜よ

月よ父よ汝なの遺せし母と住む

月よ父よ汝の照せる圓心に

×

昭和十六年

寒林のふかさをかへしくるひとり

寒林へみしらぬ路のありにけり

山林のあかるさ落葉するものなし

どんづまりの家より霧の歩をかへす

河近き晝餉こぼれび玻璃を透し

心乏し庭の草木荏らず枯る

心乏し北より雲のあれてやまぬ

寝^て咳く月光びびとびびと凍り

海鳴りのきこゆるあはき夕焼なり

錢湯にはかるや夏瘦きはまりぬ

母の文ふところに穂草ぬきならす

まんまんと出水酔ひのわかれかな

風呂錢をふところに梅雨ふりしきる

火蛾の下瘦身ばさとふせしまま

片蔭やみごもるとひとの文ありし

日覆に水打ちひとの家に住む

セルの肩つとあげて灯を高く吊る

風鈴をかかげけもののごとねむる

春晝の晝廊三原色となる

×

白し白し雪ふりやまぬ四月馬鹿

四月馬鹿雪ふりひとひ笑はざり

玻璃にすむ魚をかひきて玻璃に入る

寒木の肌に肌もて觸れんとす

寒夜たどるこの道人の家に通ず

寒林の奥へひとりになりゆく

牛乳ちちの香よの過ぎれりもの芽ぐむなり

素撲なる視野を寒林ならびたち

旅 四句

暖雨また旅に居馴れず旅に立つ

旅にたち旅に居馴れぬ佗助や

佗助に馴るれば言のなくてよし

言ふことのつたなし佗助さく庭の

冬落暉このはとほくとほくなる

底淺く荒れつぎ冬木の中をゆけり

×

寒木にしんじつすがる蝶の夢

寒木をしんじつ蝶が這ひ上る

南の戸開けて生活の事藝術の事

議論ちう玩具をあひ間に争へり

議論ちう玩具もち古りいとほしき

受胎告知二句

つとめながしかんばすつひにあをとなる

つとめながし杳い眼をする職工達

海の日の一輪さむしねなし雲

薄咳に冬日一輪のみの光

寒木を切倒し鞭を作らうか

葉を落した一本の木のごとくあれよ

雁渡るをみな男に語れといふ

女人贅語炬燵ひそかに血を怖る

冬の日がかげると蠅が死んでゐる

幸福を失つたといふか北風の中で

つまづくよ北風が鋭い音をたてる

神戸にて 一句

ボツカブリ異人の往來しげくなる

蠿いほむしり螂愚にひととかたりたし

人屑となり晩秋へあゆみるしなり

季 節 一句

地下にしむ秋へリフトが扉を開き

人を去りすてしが秋の灯にもどる

道それし吾か曼珠沙華の中

暑休永し母また同じ茄子をきる

田があまり青くて下痢をしてゐるよ

電車灼けドストエフスキー女の手

日覆のある街戀愛の映畫ばかり

芥子 二句

湧き上る妬心まひるの芥子くづれ

芥子くづるあはれ一夜の戀をするか

蠅舞へるより他を忘せんとするなり

藤の花ふきたまり風邪よみがへる

土筆あらず葺田道を友がりへ

土筆あらずその草原は海へつづき

群鷗の啼かぬ寒さよ濤たける

句の出来ぬバットの函を北風に捨つ

小さなうめき淺春の草にねたり

北風を背にただ貝殻の白き踏む

冬濤に水平線なしち小さき破船

水天なし春濤淺く陸がにより

濤のむた日輪とほくかすみ去る

